

伊藤 証 信  
しょうしん  
(1876~1963/西端)



### 1 実家で靈感に打たれ、無我愛の生活に一変

伊藤証信は、明治9年(1876)三重県員弁郡(現桑名市)の農業、伊藤清五郎の長男として生まれた。両親は熱心な浄土真宗の信者であったことから、13歳で伊藤家の菩提寺の源流寺に小僧として住み込んだ。

16歳で大垣の美濃教校(真宗大谷派)に入り、19歳まで在学、仕送りが少なかったため毎日二食で過ごした。(生涯続いた)後京都の真宗中学の4年に編入された。続いて真宗大学に入り、学術優秀・品行方正のため特待生になった。大学は東京に移転(清沢満之が学監)され、卒業論文のために毎日図書館通いしていた。

明治37年(1904)8月27日の夜、桑名の実家に帰省中の証信は、父と一緒に蚊帳の中に寝ていたが、その夜不思議な靈感に打たれて法悦の涙にひたった。その夜を境として、証信の生活態度は一変した。「我愛の生活」を脱して、「無我愛の生活」に邁進するに至ったのだ。

証信は村の共有仏堂である古ぼけた大日堂を住み家とし、「無我苑」と名づけ、「無我愛伝道」を始めた。機関誌「無我の愛」を発行し、そこを訪れる真宗大学生の求道者が多くなったので、大学は学生の出入りを禁止した。そこで30歳の証信は無我苑を解散、本願寺僧籍も返上して「脱宗号」を発刊し、各方面に多大の反響を呼んだ。中でも徳富蘆花、幸徳秋水、堺利彦らの著名人から祝意や批判の手紙が寄せられた。

無我苑の解散後、しばらくの間西ヶ原の農園に園丁として労働の日々を過ごした。その後明治39年(1906)、山口県の徳山女学校の教諭になることになった。

### 2 4年間の徳山女学校時代、竹内あさ子と結婚

徳山女学校に赴任すると、克己修道(三食、二食から断食)の生活を始めた。このような生活を4ヶ年続け、「食欲から離脱しようとしたのは、一種の我慢であった。人間の徹べき道を通らずに、一足飛びに理想の彼岸に到達しようと考え、いつしか我慢の泥沼にはまっていた」と気づいた。

ちょうどその頃、徳山町(現山口県周南市)に医家の娘、竹内あさ子がいた。彼女は6歳のとき、急に髪の毛が抜けて丸坊主になってしまい、元に戻らなかった。寂しい日々を送っていたある日、「無我の愛」を読んだ。「人間はいかなる境遇にあっても、この世に生まれて来たからには絶体の価値がある」そんな言葉に心を打たれていたとき、証信を紹介され、話を聞き、往復している間にあさ子に恋愛感情がわき起こり結婚した。その後、証信は女学校を辞し、妻を伴い上京した。

### 3 「信念」の確立と精神運動の開始

千駄ヶ谷で「我生活社」の看板を掲げた。ところが発表した論説が、その筋の忌諱にふれるということで、証信は出版法違反で5日間入獄させられた。

大正5年(1916)1月、宗教新聞「中外日報」の主筆として、夫妻は京都東山に移った。足かけ4年間、社説の他に「信仰問答」欄を担当し、読者に深い感銘を与えた。大正8年(1919)8月、中外日報が急に廃刊になったので、証信夫妻は11月末に上京、神田神保町に落ち着いた。そして、そこを「信仰策進会」の本部と定め、機関誌「精神運動」も発刊、積極的に無我愛運動を開始するに至った。

その運動は好評を博した。その頃出入りしていた女性の中には、平塚らいてう、市川房枝、与謝野晶子など著名な婦人解放運動家もいた。証信の教えを直接受けようと来訪者が多くなり、大正 10 年（1921）の春に中野に移った。あさ子の提案で「愛聖」を創刊することにし、暁烏敏（あけがらすはや・清沢満之の一番弟子で浩々洞同人）、河上肇、与謝野晶子、平塚らいてう、津田青楓（画壇の長老）ら一流の人達の寄稿があった。そして、証信は思索と研究に没頭し、西田幾多郎の著書を全部読了した。

また、同年 8 月に武者小路実篤の「新しき村」（宮崎県日向市）を訪れた。武者小路らと交流し、大きな感銘を受けた。後年、武者小路も西端の無我苑を訪れたことがあるという。思想にも信念の上にも共通の点が多いものと察せられる。

大正 11 年（1922）6 月 9 日から 4 日間にわたって「無我愛同朋全国大会」を中野無我苑で開催し、空前絶後の盛況であった。

#### 4 「竜灯団」に招かれ西端に移り、国外にも目を向ける

証信夫妻が西端に移ったのは、大正 14 年（1925）4 月のことである。証信 49 歳のときである。西端の「竜灯団」の青年求道者たちから、衣食住の一切を負担するからとの条件で招かれた。

昭和 8 年（1933）2 月、西端に無我苑の本部道場を建設すべく発願した。全国から同志の寄附を求め、翌 9 年 1 月には、木造 2 階建ての居室、本部道場など、2 年後には全てが完成した。支援者の中には、倉田百三、藤井達吉、森信三、富本憲吉、与謝野晶子、暁烏敏などそうそうたる面々が顔を連ねた。

昭和 11 年（1936）には、多種多様な宗教を一つに統一しようと「万教協和連盟」を創立させた。東京に居を移し、約 2 ヶ年にわたって各方面に運動した。多くの著名人の賛同も得たが、成果を挙げることが出来ず、西端に引き上げた。

満州には昭和 14 年（1939）から 4 回渡満し、講義や講演をし無我愛を説いた。

また、太平洋戦争終結後の証信は、「世界連邦建設同盟」に参加したり、「日本自由宗教連盟」に加わり、活躍したりした。昭和 27 年（1952）には、広島市で開催された「世界連邦アジア会議」にも夫妻で出席した。

証信が晩年の研究課題として、最も力を注いだのは、「意識主体論」であった。

「意識主体」という言葉は、証信の新造語であるが、この研究は、「靈魂不滅の科学的研究」から発足したものであると、その論文で述べている。証信の研究態度は厳粛且つ綿密で、古来の仏教書はもとより、現代物理学、化学、生理学、心理学の書籍をひもとくばかりではなく、直接物理学者を訪れて研究したほどであった。

#### 5 晩年の証信、87歳で「進生」（死去）をむかえる

証信は煙草は吸わず、酒少々、囲碁は好きであった。弟子の一人千葉耕堂は、証信の容貌について「先生は一見威風堂々とか、貴公子然たる風采ではなく、見るからに平凡なオヤジであったが、その眼の光沢を見ると、まさしく凡人でないという感を抱かせられた。眼全体がブドウ色に光っており、相手を威服する力をもっていた」と書いている。昭和 38 年（1963）1 月 14 日、11 時頃ゆっくり湯浴みして上がった途端、卒倒してそのまま呼吸が絶えた。

享年 87 歳であった。

証信の「進生式」に、長年研究の友として親しかった森信三は、次の歌を靈前に供えた。「巨いなる野の哲人よ無我愛の真理に生きてひと代つらぬく」まさに証信の一生を象徴させた一言であると言えよう。

#### ◆もっと知りたいなら

- ・『無我愛運動史概観』（昭 45 千葉耕堂）
- ・『無我愛の哲学』（昭 8 伊藤証信）
- ・『伊藤証信』（平 8 季刊誌『みどり』  
山崎正広）

※その他多数有り